

若年層における「ホラ」の使用傾向

—東京地域と大阪地域の比較を中心に—

琴 鍾 愛*

(e-mail : jakeum@cnu.ac.kr)

<目次>

- | | |
|--------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4.1. 事例分析 |
| 2. 先行研究 | 4.2. 地域別使用頻度 |
| 3. 調査の概要 | 5. 高年層(琴2013)との比較 |
| 4. 「ホラ」の使用傾向 | 6. まとめと今後の課題 |

キーワード：談話標識「ホラ」(Discourse Marker HORA)、共有情報(Shared Information)、若年層(Younger Generation)、東京・大阪(Tokyo・Osaka)、地域差(Regional Difference)

1. はじめに

本稿では、現代方言の共通語化がかなり進んでいるにもかかわらず、他地域の人とのコミュニケーションで違和感をおぼえるのは、その地域特有の談話展開方法が残っているからではないかと考え、談話展開方法に影響を与える要因の一つ(琴2005)とされる東京地域と大阪地域の若年層の説明的場面で使用される談話標識「ホラ」を対象に、その使用傾向の違いを考察した。

「ホラ」は一般に、文法レベルでは感動詞として「(目の前にある何かを指さして)ほら、見てご覧!」のように、「人に注意を促すことば」(学研国語大辞典)、「急に注意を促す時にいう語」(広辞苑)、「何かを示して相手の注意を促す時に発する語、ホレ」(日本国語大辞典)のように扱われている。しかし、会話のやり取りの中でよく使用される「ホラ」は「相手の注意を促すことば」という文法レベルの説明だけではおさまらない用法が認められる。例えば、次

* 忠南大学 日語日文学科、教授、社会言語学

の例で話者は「ホラ」を使うことで、前から共有している情報を相手に喚起させ、その共有を求めながら話を進めようとしている。

例1) あのね、この前、私、ホラ、アメリカ行ったじゃない。
その時ね、私空港でパスポートなくて、もうひどい目にあったのよ。
もう大変で…

すなわち、この例で話者は「ホラ」を使うことで、「この前アメリカ行った」という共有情報を今、発話現場で相手に喚起させ、共有を求めながら話を進めようとしているのである。

一方、「ホラ」は次の例のように、前から共有していない情報であっても共有可能であると判断される場合にも使用される。

例2) でも、ほら、最近、街でよく見かけるけど、前はあまりなかったんですね、日本の車。

ここで「ホラ」は単に「相手の注意を促す」という用法としてだけではなく、注意を促すことによって、「最近街でよく見かけるけど、前はあまり日本の車がなかったのだ」という情報を相手に喚起し、共有を求めながら話を進めるためのディスコースマーカ―として使用されていると考えられる。このように「ホラ」は会話で、情報の共有を喚起することで効果的に話を進めるためのシグナルとして使用されているが、このような「ホラ」のディスコースマーカ―としての機能に注目した研究はほとんど見つからないのが現状である。

そこで、本稿では、会話の中で前から共有している情報やこれから共有可能であると判断される情報を相手に喚起することで、効果的にコミュニケーションを行うために使用される談話標識「ホラ」を取り上げ、東京と大阪地域の若年層を対象に、その使用傾向の違いを考察する。

また、琴(2013)の東京と大阪の高年層の地域差研究との対照を通して、若年層の「ホラ」の使用傾向の特徴を明らかにしたいと考える。

2. 先行研究

「ホラ」の談話機能について指摘したものには、李(2000)、大島(2001)などがある。李

(2000)は雑談の中の物語において、「ホラ」は次のように単に相手に注目を要求するために使用されていると指摘している。

例3) まあ、そんな始まったばかりだから、まだまだと思ったけど、で、どきどきしてさあ。
そいで、何回も、何回も、何回さあ、ほら、お色直しかでいなくなる間に歌うでしょう。
そすと、司会の人、じゃあ、ここで自慢の喉を披露してもらいましょうとかって言うじゃんね。
(笑)
それで、あたしかなあと思って、どきどきして (笑) そしたら、親戚のおじいちゃんだったとかさあ。(笑)

また、大島(2001)は会話の中での「ホラ」の用法を、次のように、大きく二つのに分けて、説明している。

1) 話し手と聞き手が前から共有していた知識を発話の現場で観察可能な何かに向けたり、その知識に直接訴えたりするために使用される。

例4) パパ明日だよ、遊園地。
ほら (リュックサックを指さす)

例5) A: (鍵)2つしかないのね。
B: 2つ、だけどこの間は、ほら、会長の鍵をY先生か何かに。

2) 知識、情報、気持ちが共有されている、また共有可能であるかのように表現するために使用される。

例6) A: なかなか、この時間は集まりにくいよね、2時半って。
B: 結構、ほら、早くご飯食べなきゃいけないでしょう。

李(2000)、大島(2001)は従来、単に注意を要求する感動詞として使用されているという指摘から一歩進み、「ホラ」の会話における機能について扱っているという点で評価できると考えられる。しかし、李(2000)、大島(2001)は、「ホラ」の談話標識としての役割については指摘していない。

そこで、琴(2013)では説明的場面で使用される「ホラ」の談話標識としての機能を明らかにし、「ホラ」には前からの共有情報や今後共有可能な情報について喚起し、相手と情報の共有のもとで会話を進めていくためのディスコースマーカ―としての用法が認められると指摘している。

本稿では、既存の先行研究で対象にしていなかった東京地域と大阪地域の若年層話者を対象に、説明的場面において談話標識として機能する「ホラ」を取り上げ、具体的談話資料と使用傾向を量的に提示することで、両地域の若年層話者における「ホラ」の使用傾向の地域差を明らかにしたい。さらに、琴(2013)の東京と大阪地域の高年層の地域差研究との対照を通して、若年層における「ホラ」の使用傾向の特徴を考察したい。

3. 調査の概要

本稿で対象とする東京と大阪地域の会話資料は、次の調査によって、収集したものである。

①調査時期

東京地域：2010年11月～2013年8月

大阪地域：2017年12月～2018年1月

②インフォーマント

東京地域：東京や首都圏出身の若年層女性話者4名

大阪地域：大阪出身の若年層女性話者4名

③調査方法

調査は2～3人の話者が参加し行った。本稿では、その中で方言や自分の専門分野、趣味などの相手の情報要求に対して、各方言話者が説明を行っている場면을対象にした。

④談話資料

談話資料は、東京地域の若年層話者の約4時間、大阪地域の若年層話者の約4時間、合計約8時間の録音資料を文字化したものである。

4. 「ホラ」の使用傾向

本稿では「ホラ」の談話機能を明らかにするため、琴(2013)を参考に、両地域の若年層話者の談話資料を検討した。その結果、東京や大阪地域の若年層話者の談話資料から観察される「ホラ」は出現頻度などに違いが認められるものの「前からの共有情報や今後共有可能な情報を喚起することで、相手と情報共有のもとで話を進めるようとする談話機能」が認められた¹⁾。詳しくは、琴(2013)を参照されたい。

そこで、本稿ではまず、調査から収集した談話資料の中で、両地域の若年層話者の「ホラ」の使用例を典型的に表わしている場面を地域ごとに、三つずつ提示し、事例分析を行なう。次に、「ホラ」の使用頻度を具体的に示すことで、両地域の説明的場面における談話標識「ホラ」の使用傾向を明らかにする。

4.1. 事例分析

4.1.1. 東京地域

談話資料1で話者は「どうしてそんなところ（アフリカ）で生きていけられるのか」という相手の情報要求に対して、「ナンカ」「ダカラ」などの様々な談話標識を使用し話を進めようとしている。特に①で話者は「協力隊と、国からのシステムで、泊まる場所もしっかりしてし、援助も出ている」という情報について相手と前から共有していないが、これから共有可能であると判断したので、「ホラ」でその情報を喚起し、共有を求めながら話を進めている。すなわち、「ホラ」は情報の共有を相手に喚起し、共有を求めながら話を進めるためのディスコースマーカとして使用されていると考えられる。次の談話資料2でもこのような傾向が見られる。

談話資料 1

(なんでそんなところ（アフリカ）で生きていけられんの。)

①でも、ほら、協力隊と、国からのそういうシス、泊まる場所もしっかりしてし、援助も出てる。

②食べ物も、たぶん、なんか、ちょっとあるじゃない、日本のインスタントとか。

1) 本稿では「ホラ」の機能を次のように、「①前からの共有情報を喚起することで、相手と情報共有のもとで話を進める、②今後共有可能な情報を喚起することで、相手と情報共有のもとで話を進める」という二つに分けて考察している。しかし、本稿で対象にしているインフォーマントはお互いに知り合い同士ではあるが、共有している情報がそれほど多くないので、主に②の用法が認められた。そこで、本稿では、①と②の用法を特に分けずに考察を進めることにする。

③だから。

④ひゃーか、国によって、こう、なんか、一人か2人くらい派遣されて行ってるから。

⑤何人か合計はわかんないけど。

談話資料2でも「ドラマは見ているのか」という相手の情報要求に対して、話者は「ホラ」を使うことで、情報の共有を喚起しながら話を進めている。すなわち、「子供が寝てから勉強しようと思うと、遅くなってしまうのだ」という情報について、相手とこれから共有可能であると判断したので、「ホラ」でその情報を喚起し、共有を求めることで相手と情報共有のもとで話を進めようとしているのである。

談話資料2

①お、私ドラマね、日本ドラマとかゆっくりに見たいんだけど見る時間がない。

②いつもほら子供が寝てからね、勉強しようなんて思うと遅くなっちゃって。

③で、あ、テレビ見たらまた時間ないしなあなんて。

④だからなんか全然見なかった。週末も遊びに行かなかったし。あんまり

⑤かわいそうで子供たちに。だから今遊んだりするけど。

談話資料3でも「選挙でまた（政権が変えられるのか）」という相手の情報要求に対して、話者は「ホラ」で「民主党はただ自民党がよくないから一瞬だけ民主党にして少し空気変えようとしたけど、結局また最後は自民党になる気がする」という情報の共有を喚起しながら話を進めている。すなわち、話者はこの情報について、相手と共有可能であると判断したので、「ホラ」でその情報を喚起し、共有を求めることで相手と情報共有のもとで話を進めようとしているのである。このような「ホラ」の使用傾向は東京地域の若年層の説明的場面において多く見られる。

談話資料3

(選挙でまた?)

①あ、変わるんじゃない。

②だって、もう、ほら、民主党なんて、ただ自民党がよくないから一瞬だけ、民主党にして、ちょっと空気変えようとして、結局また最後は自民党なる気がする。

③うちらはみんな変えてるけど。

次は大阪地域の例である。

4.1.2. 大阪地域

談話資料4で話者は「掃除をあまりしない韓国人の知り合いの家で虫は出ないのか」についての相手の情報要求に対して、「やっぱり」「だから」など、様々な談話標識を使用しながら話を進めている。特に、⑤では相手と以前から共有している情報ではないが、これから共有可能であると判断したので、「ホラ」で、「向う（韓国）は配達 of 食べ物がたくさんあるから、電話一本で何でも来るようになってるのだ」という情報の共有を相手に喚起しながら話を進めている。ここで、「ホラ」は共有可能な情報を相手に喚起することで、相手と情報共有のもとで話を進めるためのディスコースマーカ―として使われていると考えられる。

談話資料 4

- ①まあ、でも、そこまでではないけど。
- ②やっぱり、ちょっと、「うわ、きた」みたいな感じのんはあるから、さあ！みたいな感じで、腕まくって、いったん、とりあえず、この、あの、あれから片付けようか。
- ③んで、あれ、台所自身も、キッチンもシンクがすごい狭いから。
- ④だから、家で、ほぼ料理もしいひんし、〇〇、オンニが作った食べ物もなんか、食べたことない。
- ⑤常に、向こうなんて、ほら、何？、配達 of 食べ物がたくさんあるから、電話一本で何でも来るから。
- ⑥基本電話一本で来る、食べ物か食べたことない。

〈共通語訳〉

- ①まあ、でも、そこまでではないけど。
- ②やっぱり、ちょっと「うわ、すごい」みたいな感じはあるから、さあ！やるぞ！みたいな感じで、腕まくりをして、いったん、とりあえず、この、あの、あれから片付けようか。
- ③それで、あれ、台所自身も、キッチンもシンクがすごく狭いから。
- ④だから、家で、ほぼ料理もしないし、〇〇、オンニ（韓国の知り合いのお姉さん）が作った食べ物なんか、食べたことがない。
- ⑤常に、向こう（韓国）なんて、ほら、何？、配達 of 食べ物がたくさんあるから、電話一本で何でも来るから。
- ⑥基本的に、電話一本で来る、食べ物か食べたことがない。

談話資料5でも「ホルマキパーティー」についての相手の情報要求に対して、話者は様々な談話標識を使用しながら話を進めている。特に、⑩で話者は「ホラ」を使うことで、「もう（あなたも）車の運転ができるから（私が迎えに行かなくてもいいのだ）」という情報を相手に喚起させ、その共有を求めることで相手と共有情報のもとで話を進めようとしている。ここでも、「ホラ」は共有情報を相手に喚起し、相手と情報共有のもとで話を進めるためのマーカーとして使われていると考えられる。

談話資料5

- ①ホルマキ、いつでも作ったんで！
- ②じゃあ、ホルマキパーティーしよ、しよ！ってゆっても、いつ作んねんって話やん？
- ③いつにする？って決めないと、あかん訳やんか。
- ④だから、ほんなら、いつやねん？って
- ⑤めし、いつやねん？ったら、28日、仕事終わりやから、29でも、30でも、いいよって。
- ⑥いつやねんって！、お前が決めろって、べつに、〇〇〇は時間あるから。
- ⑦ほんなら、29って。
- ⑧じゃあ、29どこに、何時やねん？って。
- ⑨「〇〇〇迎えに来てくれるんやろ？」「行くか、ほけ」って
- ⑩お前が来い！ってゆって。
- ⑪あっ、もう車、ほら、運転できるから。

〈共通語訳〉

- ①ホルマキ、いつでも作ってあげるよ。
- ②それじゃあ、ホルマキパーティーしよう、しよう！と言っても、いつ作るのって、話でしょ？
- ③いつにする？って決めないと、いけないでしょう。
- ④だから、そしたら、いつなの？って
- ⑤ご飯、いつなの？って、言ったら、28日で仕事終わりだから、29でも30でもいいよって。
- ⑥いつなのってば！、お前が決めろって、べつに、〇〇〇は時間あるから。
- ⑦そしたら、29（日）って。
- ⑧じゃあ、29（日）、どこで何時なの？って。
- ⑨「〇〇〇迎えに来てくれるんでしょ？」「行くもんか、ばか」って。

⑩お前が来い！って言って。

⑪あつ、もう車、ほら、運転できるから。

談話資料6は大阪に来ている留学生について話である。

談話資料6

((韓国から来ている〇〇ちゃん) ほんとに食べるの?)

①そうそう、もうなあ、うん、〇〇ちゃんが大食いかじゃなくて、初めての、海外で、初めての日本やねん。

②まあ、日本語勉強してるわけわけやから、興味があるわけやんか?

③もうな、あれ食べたい、これ食べたいってのが、すごい多くて、で、お寿司とかもな、ほら、結局教えてくれたお寿司屋さんとか、時間がない。

④で、もう結局、心齋橋筋歩いてたら、なんか、あの紫の、元禄寿司か?

⑤あつ、これ回転ずしやでゆったら、行きたい！ってゆって。

⑥二人で、3・4皿を、こう、1貫ずつとかで食べて、そうやって、で、また、どっか行ったら、ちょっとこれ食べたいってゆったら、ちょっと半分こしてとか。

⑦ひたすら食べてたら、2キロぐらい増えた。(笑)

(共通語訳)

((韓国から来ている〇〇ちゃん) ほんとに食べるの?)

①そうそう、なんかね、うん、〇〇ちゃんが大食いかじゃなくて、初めての海外で、初めての日本なの。

②まあ、日本語勉強しているから、興味があるでしょう?

③もう、さあ、あれ食べたい、これ食べたいってのが、すごく多くて、で、お寿司とかもね、ほら、結局教えてくれたお寿司屋さんとか、時間がない。

④で、もう 結局、心齋橋筋歩いていたら、なんか、あの紫の、元禄寿司か?

⑤あつ、これ回転ずしだよって言ったら、行きたい！って言って。

⑥二人で、3、4皿を、こう、1貫ずつとかで食べて、そして、で、またどこ行ったら、ちょっとこれ食べたいとか言ったら、ちょっと半分こしてとか。

⑦ひたすら食べていたら、2キロぐらい増えた。(笑)

ここでも話者は「(韓国から来ている〇〇ちゃん)ほんとに食べるの?」という相手の情報要求に対して、話者は様々な談話標識を使用しながら話を進めている。特に③で話者は「ホラ」を使うことで、「結局教えてくれたお寿司屋さんには時間が無い(から行けなかった)」という情報を相手に喚起させ、その共有を求めることで相手と共有情報のもとで話を進めようとしている。ここで、「ホラ」は共有可能な情報を相手に喚起し、相手と情報共有のもとで話を進めるためのディスコースマーカ―として使われていると考えられる。

次の4.2ではこのような「ホラ」の使用頻度を全て示すことで、両地域の若年層における「ホラ」の使用傾向の違いを明らかにする。

4.2. 「ホラ」の地域別使用頻度

今回対象にした東京、大阪地域の若年層の説明的場面における「ホラ」の使用頻度を調べた結果をまとめたものが<表1><表2>である。

<表>の縦軸には、インフォーマントとその話者から採集した文の総数を括弧に入れて記した。また、横軸には各話者別の「ホラ」の使用数と1文当りの平均使用数を記した。1文当りの平均使用数は、次の方法によって算出したものである。

$$\frac{\text{談話標識「ホラ」の総使用回数(延べ数)}}{\text{文数}} = \text{1文当たりの平均使用数}$$

例えば、<表1>からF1話者は、349文の中で「ホラ」を20回、発話したことになり、その1文当りの平均使用数は、0.057回ということになる。

<表1><表2>から話者によって、ある程度ばらつきは見られるものの、大まかに類似の傾向が認められることが分かる。<表1><表2>から大阪地域の若年層に比べ、東京地域の若年層話者の「ホラ」の使用が多くなっていることが分かる。

<表1> 東京地域

話者 (文数)	使用数	1文当りの 平均使用数
F1 (349)	20	0.057
F2 (176)	19	0.107

F3 (316)	17	0.054
F4 (70)	0	0.000
総文数 (911)	56	0.061

<表2> 大阪地域

話者 (文数)	使用数	1文当りの 平均使用数
F1 (261)	3	0.011
F2 (195)	1	0.005
F3 (48)	1	0.021
F4 (183)	0	0.000
総文数 (687)	5	0.007

<表3>は各地域の「ホラ」の1文当りの平均使用数を比較したものである。<表3>から東京地域の若年層話者は1文当り0.061回、大阪地域の若年層話者は1文当り0.007回使用していることが分かる。また、<表3>の括弧の数字は東京地域の若年層で「ホラ」が1回使用されると仮定した場合の大阪地域の若年層の使用数である。すなわち、東京地域の若年層で「ホラ」が1回使用されるとき、大阪地域の若年層では0.115回使用されるということになる。この数値から「ホラ」の使用頻度は東京地域の若年層で高く、大阪地域の若年層では少し低くなっていることが分かる。

<表3> 「ホラ」の使用頻度の地域差

地域 (総文数)	総使用数	1文当りの平均使用数
東京方言 (911)	56	0.061 (1)
大阪方言 (687)	5	0.007 (0.115)

これは言い換えると、東京地域の若年層話者は相手に情報の共有を喚起し、その共有を求めることで、相手と共有情報のもとで話を進めるようとする傾向が大阪地域の若年層より強いことを表している。

5. 高年層(琴2013)との比較

琴(2013)では、東京と大阪地域の高年層の説明的場面で使用される談話標識「ホラ」の使用傾向がどのようなものであるかを明らかにした。

その結果、「ホラ」は大阪地域の高年層では使用されていないことが明らかになった。これは言い換えると東京の高年層では相手に情報の共有を喚起し、相手と共有情報のもとで話を進めるようとする傾向があり、大阪地域の高年層ではそのような傾向が認められないことを表している。

<表4> 「ホラ」の使用頻度の地域差（高年層、若年層）

地域	高年層 総使用数/総文数 (1文当りの平均使用数)	若年層 総使用数/総文数 (1文当りの平均使用数)
東京方言	69/1540 (0.045)	56/911 (0.061)
大阪方言	0/1676 (0.000)	5/687 (0.007)

このことから大阪地域では高年層では使われていなかった「ホラ」という形式が何かの影響で若年層で使われるようになったということが予想される。

小西(2003)は東京方言が他地域方言に与える影響を関西若年層における「ダカラ」の受容を例として考察している。小西(2003)は「東京のダカラ・ダッテと同じ機能を有する形式が従来の関西方言にないことが受容の一因」であると指摘している。本稿での「ホラ」の場合も本来大阪地域の高年層では使われていなかったが、何らかの理由で大阪地域の若年層に受容されるようになり、使われるようになったのではないかと考えられる。この原因については、今後詳しく分析していく必要があると考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、現代方言の共通語化がかなり進んでいるにもかかわらず、他地域の人とのコミュニケーションで違和感を感じるのは、その地域特有の談話展開方法が影響しているのではないかと考え、その原因一つであると言われる東京地域と大阪地域の若年層の説明的場面で使用される談話標識「ホラ」を対象にその使用傾向の違いを考察した。

その結果、「ホラ」の使用頻度は大阪地域の若年層に比べ、東京地域の若年層で多く使用されていることが明らかになった。これは言い換えると、東京地域の若年層では相手に情報の共有を喚起し、その共有を求めることで相手と共有情報のもとで話を進めるようにする傾向が強く、大阪地域の若年層ではそのような傾向が東京地域の若年層に比べ、弱いことを表している。このような談話標識の使用の傾向の違いが談話展開の方法に影響を与え、地域差を生み出しており、共通語化が進んでいるにもかかわらず、違う地域の人とのコミュニケーションにおいて誤解や摩擦のような違和感を覚えさせているのではないか。

本稿では、また、琴(2003)の東京と大阪の高年層の地域差研究との対照を通して、若年層の「ホラ」の使用上の特徴を明らかにした。その結果、大阪地域の高年層では使用されていなかった「ホラ」が若年層で使われていることが明らかになった。小西(2003)はこのような傾向について、東京方言が他地域方言に与える影響を関西若年層における「ダカラ」の受容を例として説明しており、「東京のダカラ・ダッテと同じ機能を有する形式が従来の関西方言にないことが受容の要因と考える」と指摘している。本稿での「ホラ」の場合も高年層では使われていなかったが、何らかの理由で大阪地域の若年層で受容されるようになり、使われるようになったのではないかと考えられる。この原因については、今後、更なる考察が必要であろう。

また、さらに対象を広げ、「ホラ」の用法を詳しく考察することも必要であり、情報共有に関わるほかの談話標識にも注目し、研究を進めることも必要であろう。

【参考文献】

- 大島弘子(2001)「ホラの機能について」『日本語教育』108、pp.34-41。
 小西いづみ(2000)「東京方言が他地域方言に与える影響」『日本語研究』20、東京都立大学国語学研究室、pp.19-34。

- 琴鍾愛(2005)「日本語方言における談話標識の出現傾向-東京方言、大阪方言、仙台方言の比較-」『日本語の研究』1-2、pp.1-18.
- _____ (2013)「説明的場面で使用される談話標識『ホラ』の使用傾向-東京・大阪・仙台方言の地域差を中心に-」『日本学研究』40、檀国大学校日本研究所、pp.219-235. (DOI: https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.1.2_1)
- 李麗燕(2000)『日本語研究叢書12 Frontier series 日本語母語話者の雑談における物語の研究—会話管理の観点から—』くろしお出版、pp.206-212.

辞書類

- 金田一春彦・池田弥三郎編(1988)『学研国語大辞典 第二版』、学習研究社.
- 新村出(2008)『広辞苑』、岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(2000)『日本国語大辞典第二版』、小学館.

논문 투고 일자 : 2019. 12. 26.
논문 심사 일자 : 2020. 01. 28.
게재 확정 일자 : 2020. 01. 30.

 < 要 旨 >

 若年層における「ホラ」の使用傾向
 — 東京地域と大阪地域の比較を中心に —

琴鍾愛

本稿では、共通語化がかなり進んでいるにもかかわらず、他地域の人とのコミュニケーションで違和感を感じるの、その地域特有の談話展開方法が影響しているのではないかと考え、その原因一つであると言われる談話標識「ホラ」を対象に、東京と大阪地域の若年層の使用傾向の違いを考察した。また、東京と大阪の高年層の地域差研究との対照を通して、若年層の「ホラ」の使用上の特徴を明らかにした。

その結果、「ホラ」の使用頻度は大阪地域の若年層に比べ、東京地域の若年層で多く使用されていることが明らかになった。これは言い換えると、東京地域の若年層では相手に情報の共有を喚起し、その共有を求めることで相手と共有情報のもとで話を進めるようとする傾向が強く、大阪地域の若年層ではそのような傾向が弱いことを表している。このような談話標識の使用の傾向の違いが談話展開の方法に影響を与え、地域差を生み出しており、共通語化が進んでいるにもかかわらず、違う地域の人とのコミュニケーションにおいて誤解や摩擦のような違和感を覚えさせているのではないかと考えられる。

また、東京と大阪の高年層の地域差研究と対照した結果、大阪地域の高年層では使用されていなかった「ホラ」が若年層で使用されていることが明らかになった。これは、高年層では使われていなかった「ホラ」が、何らかの理由で大阪地域の若年層で受容されるようになり、使われるようになったのではないかと考えられる。この原因については、今後更なる考察が必要であろう。また、今後は対象を広げ、「ホラ」の用法を詳しく考察するとともに、情報共有に関わるほかの談話標識にも注目し、研究を進めることも必要であろう。

 Regional Differences in the Usage of the Discourse Marker “Hora”:
 Comparison between the Younger Generations in Tokyo and Osaka

Keum, Jong-Ae

“Hora” is a discourse marker that is used in communication to emphasize information that has already been shared, or can be shared in the future, to direct conversations on the basis of the information. In this paper, differences in the usage pattern of “hora” between the younger generations in Tokyo and Osaka were analyzed.

It was observed that the discourse marker “hora” appeared more often in Tokyo than in Osaka. This suggests that the younger generation in Tokyo has a communicational tendency of reminding listeners of their shared information, and leading the conversation accordingly. This tendency was comparatively weaker in Osaka.

Therefore, we can infer that differences in the usage pattern of discourse markers can lead to miscommunication among various regional people despite the fact that a common language might be used in those regions.